

# ブックハンティング

権力と表象

## 政治の美学

著 ● 田中 純

2009



現在、日本の思想界において

てもっとも注目すべき存在の一人といつてよい田中純が、『都市の詩学』（東大出版会）に続く大著『政治の美学』をこのほど刊行した（A5判・556頁＋註・図表54頁・5000円・東京大学出版会）。前にこの欄で取り上げた『残像のなかの建築』（未來社）以来、主として建築を軸に広義の意味における表象領域を、凡百の表象分析論の水準をはるかに超える形で、たえず変形と越境を繰り返しながら流動し続けるダイナミックな社会／歴史空間の文脈の拡がりのなかで鮮やかに解説してみせる田中の手腕には瞠目する他なかったのだが、今回の新著はそうした田中の仕事に、もともと従来の著作以上に重き意味を持つ、ある種転機の手書といふべきものではないかという気がする。おそらくこれまでの田中の著作を追ってきた多くの読者は本書から大きな衝撃を受けることになるだろう。

私が田中の仕事に注目してきた大きな理由の一つは、田中が表象の問題をつねに「表象されたもの」と「表象されえなかつたもの」のあいだの裂け目・亀裂を意識しながら扱っている点であった。「表象されえなかつたもの」とは、ある実定性を伴って表象が成立する瞬間に消失されてしまう表象の根源であり起源を意味している。この表象の根源Ⅱ起源は「表象されたもの」が成立した瞬間消失されてしまふがゆえに、「表象されたもの」の世界においてはそれは私たちが通常受容している日常世界とは異なる重なりある——つねに痕跡として事後的にしか認識されえないものである。だがそれは同時に、ある表象の水位が形づくられる際に必ず働いているいわば表象生産の原動力といふべきものなのだ。つまり「表象されえなかつたもの」とは表象の成立単位から消えている表象生産の「力」に他ならないのだ。したがって表象

産出の過程にはつねに産出された表象体とこの「力」のあいだの関係が、しかもそのうちに矛盾や相克を孕む屈曲した関係が存在することになる。表象体はこの「力」を否定し消し去ろうとし、「力」はそうした表象体の抑圧を押し破って噴出しようとするからである。そしてこの矛盾・相克が表象されたもの「と」表象されなかつたもの「の」あいだに裂け目・亀裂をもたらすのである。それはおそらく別な角度からいうと次のように言い換えることが出来るだろう。すなわち表象体とは表象を産出する「力」が表象の産出過程のなかで別な何ものか、より正確に言えば、表象体の産出に相応しい別な「力」の形に置き換えられることによつてはじめて成立可能となるのだ、というようである。それは表象の持つ実定的な具体性、あるいはそれを支える秩序や意味上の文脈を可能にする「力」に他ならない。そして私たちはこの「力」をこ

そ「権力」とよぶのである。このとき「権力」はおそらく二重の役割を担うことになる。一つはすでに触れた「表象されたもの」と「表象されなかつたもの」のあいだの亀裂を充填しつつなめらかな表象空間の表層を形づくるという役割であり、もう一つは、そうした表象空間を社会／歴史空間へと連続的につなげてゆく役割である。表象空間のなめらかな表層が形づくられる過程は、そのまま社会／歴史空間の実定性が形づくられる過程と重なりあうからである。だが、というべきか、だからこそというべきか、権力の作用によつて秩序化され可視化される表象と社会／歴史空間の複合体としての実定性の水位のうちには、つねにその実定性を突き破ろうとする「力」の蠢動が隠されているのを忘れてはならない。

こうした「力」の単位は、実定性が揺らぎ始めると、いわば亀裂の縫い目を押し開くようにして表層へとせり出し始める。それは具体的には社会／歴史空間が「危機」と呼ばれる状況に陥ったときである。そしてそうした「危機」の瞬間、消し去られた「力」が突然「権力」へと帰帰してくるのである。本書で田中が問題にしようとしているのは、まさにそうした「危機」の瞬間において取り上げられているのは、I部において取り上げられている映画『民族の祭典』の作者リーフェンシュタール、映画『ヒトラー』の作者ジールバールク、そしてヴァイマル期の右翼義勇軍戦士を論じた『男たちの妄想』の著者テューライトからも明らかである。1930年代のナチズムの時代である。そしてそこにはさらに、そうしたナチズムの時代という「危機」の瞬間の持つ意味を根源Ⅱ起源に遡って明らかにしようとする原理論的なまなざしと、ナチズムの時代が表象の単位において帰帰してきた時代としての1970年代の「危機」の様相を見据えようとする表象分析的なまなざしが重ねあわされてゆく。前者は本書の中心の内容を形づくるⅡ・Ⅲ部において「男性結社論」へと結実

し、後者はI部におけるジールバールク、テューライトについての考察を経て70年代のロッキン・デヴィッド・ボウイおよび「エロヴィッド」の頭脳警察(PANTA)についての考察へと結実してゆく。本書における田中の論のこうした時間的・領域的な振幅と論点の変幻自在ともいふべき錯綜ぶりは、ほとんどスリリングといつてもよいほどののだが、とりわけⅡ部、Ⅲ部における論の展開にはスリリングとむしろ危うさ・際どさともいふべきラディカルな思考の噴出が見られる。そしてそれは従来の田中の著作には見られなかつた質を含んでいるように思える。より具体的にいえば、ヒトラー自身はもとより戦間期下イッのブレ・ナチズムの精神土壌のシンボルともいふべきゲオルゲ・クライスとその周辺の思想家・文芸者、それに呼応する日本浪漫派の保田與重郎、三島由紀夫、そして保田・三島の精神圏のものとも深い理解者であった橋川文三までも登場する。その論において田中は、厭うべきタブーとされてきたナチズムⅡファシズムの精神の核心にま

で手を突っ込んでいるのである。なぜ田中は本書でそこまでやらねばならなかつたのか。危機とは、権力へと「力」が回帰してゆく瞬間である。この瞬間、隠されていた権力の核心が明らかにされる。そしてその核心としての「力」の回帰Ⅱ露呈によつて、権力が作り上げてきた秩序空間（法状態）は一挙に停止される。だからそれは危機なのだ。だがじつはそこにはもう一つの問題が潜んでいる。権力が「力」の回帰によつて揺さぶられ法状態が停止する瞬間は、同時に権力が生成する根源Ⅱ起源の反復として瞬間、つまり権力（法状態）が産み出される神話的な特権性を帯びた瞬間でもあるからだ。ここにおいて危機の瞬間の持つ意味が両義化される。危機の瞬間において権力（法状態）は「力」の回帰によつて破壊されずたずたにされるが、同時にそれは権力を権力たらしめる垂直な超越性としての「力」が頭上を超越する瞬間、言い換えれば社会／歴史空間そのものの根源Ⅱ起源を頭わにさせる神話的な瞬間でもあるのである。そしてこの両義性

は、実定化された表象世界が回帰する「力」によつて粉々に破壊され断片化されてしまう瞬間と、表象世界の底を穿つようにして噴出する「力」そのものとしての表象世界、すなわち表象を表象たらしめる根源Ⅱ起源の

反復・再生としての意味を持つ超越的な表象世界の現われの瞬間の両義性に重ねあわされる。この破壊と生成Ⅱ再生の両義性は、聖と俗の、生と死の、断片化と統合の、さらには美的なもの（審美性）の生成のメカニズムの持つ両義性に他ならない。そして何より重要なのはこの両義性が、本書で田中が言及しているカントロヴィッチの『王の二つの身体』、ルネ・ジエールの『暴力と聖なるもの』、今村仁司の『暴力のオントロジー』などが提起してきた社会形成の起源としての暴力と表象の絡み合いの問題に深く関わっているからである。もしナチズムの根源的批判がありうるとすれば、そして根源的な意味における権力批判が可能であるとすれば、この地点まで踏み込んだ考察が前提となる。

この起源の場所ともいふべき暴力と表象の絡み合いに関して田中が本書において見ようとしているのは何なのだろうか。おそらくその核心をなしているのが、ホフマンスタールの『詩についての対話』の一節にある「いけにえ（犠牲）との一体化」のモティーフである（70頁参照）。いけにえを殺戮する暴力は、起源としての暴力（力）の噴出であると同時に、いけにえⅡ犠牲Ⅱ代理のメカニズムによる、表象産出の原動力でもある。そこに



政治の美学

出版ニュース

出版ニュース

出版ニュース